て会のためには随分御世話して下さった。終戦後常務理事は他界され、先生は御健康が勝れず、足場のわるい愛育会にも御姿を見せなくなられたが、それでも何かというと御心にすがることが多かった。

おやじというものは、動けなくてもいい、口がきけなくてもいい、ただ生きていてくれさえしたら私たちは安心していられる。そのおやじのひとりを失ったことは私個人としても寂しい限りであり、愛育会の将来のためにも大きな打撃である。先生の偉大な霊におすがりして、将来を開拓してゆくのが私たちの責務である。

（愛育病院長）

恩師倉橋先生をしのぶ

武田雪夫

今でも私は、中野のお宅へ伺ったら、あの温顔で、「ねえ武田君」と、声をかけて下さりそうな気がしてならない。！—先生の亡なられたという事が、まだ夢の様で、実感としてせまって来ないのである。私は、これから、先生の恩顧と追憶の二十年にも余る長いフィルムを、くりひろげて見たいと思う。あの慈父にもまさる、やさしさのこもった温顔を目の前に浮かべながら。

×

先生のお宅の二階のあの角のまるい敷物をしいたお室である。窓から茂った青葉がのぞいていた。

今後、幼児のための童話のために専心しようとお話した私に、先生は、しずかに、こんなことをいわれた。それは、今も、はっきり私の心に残っている。

「君が、幼児童話に精進する気持は、全く壮とするよ。幼児童話は、容易の様でいて実は、むずかしいものだからね。」

「幼児童話は、作意が濃すぎては、幼児の心理に適しないしかといって、あまりうすければ、全くよろこばれない。いわば、無技巧の技巧だね。だから、ただ努力と苦心だけで、よき幼児童話を作り得るとは限らない。もちろん不用意な思いつきなどで、幼児をたのしませ、よろこばすことなど出来っこないね。こう考えると、年長の子供の童話に比して、幼児童話の少いのは当然といえるよ。」

そういって先生は、机の上にのっている、お目にかけに、

この前お持ちした私の幼児童話の原稿をお手に取られながら、

「君の幼児童話に対する態度は、いいね。しっかりやって、よい物をもっとたくさん書きたまえ」

といわれたが、このお言葉に私は、どんなに励まされたか知れない。全く先生は私には忘れられない偉大なる恩師である。

×

ある年の八月、東海道の辯天島の海水浴場である。その日まで数日間、近くの浜松市の小学校で開かれた講習を了えられた先生は、そこへ休養に来られたのである。電話で浜松へ連絡を取った私は、示された時間に、一旅館に先生を訪れた。先生は大へんよろこばれ、

「やあ、よく来た、よく来た。ぼくは、これから小舟で、島めぐりをするんだが、君も一しょに行かないかね」といわれた。私は、先生のあとから舟に乗りこんだ。

先生は、舟の中にしいた、ござの上に、ゆったりと坐っておられた。私が、自分の故郷が、そこから程近い豊橋であることをお話すると、先生は、にこにこされながら、

「じゃあ、ぼくたちは、東海人種だねえ。ぼくも静岡生れだからね」といわれた。

島の松の枝を吹きならす夕風に舟の中は、昼の暑さを忘れさす程涼しかった。私の胸には、卓の上のコップについだサイダーのように、よろこびの心が、ふきこぼれるのだった。

×

やはり、ある年の夏。あちこちの講習会や講演を了えた私は、京都に大塚喜一氏を訪ねた。すると、倉橋先生が、京都へ来ておられるという。ではと、同氏の案内で、先生をお宿へお訪ねした。案内を乞うと、先生は、今、涼んでおられるという。何でも、鴨川べりの宿だった。女中のあとから、廊下を川原の床に近づいて行くと、先生は、

「ああ、武田君、大塚君、こちらへ来たまえよ」と、親しげな声をかけて下さった。

ずい分暑い夜だった。先生は、ゆるやかに開いた浴衣の胸もとに、団扇で静かに風を送っておられた。そして、どこからどこを歩いて来たかと、私の旅のことを聞かれた先生のお顔を、ぼんぼりのやわらかな光が照らしていた。

川風と川瀬の水音の涼しさ。頭上には、美しい星空が、広く広くひろがっていた。

×

これも、ある夏の旅先でのことである。

ある日、大阪の私の宿に、留守宅から、分厚い手紙がとどいた。附箋がついている。裏を見ると、黒々と太い墨の字で「倉橋惣三」とある。開けると、京阪のあちこちの幼児関係

の施設への紹介状だった。旅に出る前お願に上った時、あいにくお留守だった先生が、間もなく帰られてのおたよりだった。その末尾に、「このたよりが、間に合って役立てば幸甚」というお言葉のあったことは、今も忘れられない。もちろんそれは間に合ったし大いに役立って幸した。先生は、いつもこうした大いなる愛情を我々にもそそがれる偉大なる方であった。

×

先生のなつかしい思い出は、いつまでも尽きないが、今頃は花咲く天国の野で、星輝く天国の空の下で、フレーベルやアンデルセンと、それを取巻く天使の子等と歓語しておられることをしのんでペンをおく。

師よ、まずしき弟子を何とぞまもりたまえ。
師は永遠に高く輝く春の星

（童話作家）

× × ×

先生のこと一つ

多田鉄雄

幼児教育発展に記された比類なく偉大な先生の足跡が今更に偲ばれる。前夜祭（お通夜）の折、御令閨が先生の用心深かったお話をなさって「主人は石橋を叩いても渡らないとでも申しましょうか」と云われたのであるが、たしかに先生が進まれて行く有様を見ていると、気の短い人々に取っては何か物足りないように感じられたかも知れない。しかし「凡ての幼児に就学前教育を。凡ての幼児が同様の施設で等しく教育を受けること」の理想が先生の胸中で不動の信念をなされており、無理押しをせず、それだけに他人からは窺えないほどの御苦心をつねに払って努力されたのであったし、先生が一旦開拓され建設されたお仕事はゆらぎもない確固たるものとなっていたのである。例えば幼稚園令公布の折は、むしろ